

2013年度
非文字資料研究センター・神奈川大学図書館共催
第1回公開展示・第2回公開研究会

戦時下大衆メディアとしての紙芝居 — 国策紙芝居とはなにか

【公開展示】

期 間：2013年11月27日（水）～12月11日（水）
会 場：神奈川大学図書館 展示ホール（横浜キャンパス）

【公開研究会】

日 時：2013年12月4日（水）
13:30～17:30
会 場：神奈川大学図書館 視聴覚ホール（横浜キャンパス）
開会挨拶：田上 繁（非文字資料研究センター長）
報 告：「戦意高揚紙芝居コレクションの概要」
（非文字資料研究センター事務局）



本センターが収集した「戦意高揚紙芝居コレクション」の整理が終了したことを機に、今後の研究資料としての活用方策を探るために、図書館との共催で公開展示・実演会を企画するとともに、本コレクションの旧蔵者・櫻本富雄氏を迎えて、公開研究会を開催した。



写真1 公開展示①



写真2 公開展示②

【公開展示】

本センター所蔵コレクションのうち20作品を選び、原本、作品紹介パネル、関連資料の展示を行った。展示期間の観覧者は100名を超え、お問い合わせも多かったことから、期間を12月20日（金）まで延長した。

【公開研究会】

公開研究会に先立ち、本センター事務局からコレクションの概要説明を行うとともに、神奈川大学放送研究会、なつかし亭・岸本茂樹氏のご協力により、上記4作品の実演を行った。参加者は合計100名を超えた。

戦意高揚紙芝居コレクションの概要（非文字資料研究センター事務局）

紙芝居という大衆メディアには、戦前と戦後に2回の興業上のピークがあったとされる。

戦後は、GHQの占領期1946年から1952年までの7年間くらいが最盛期であったが、紙芝居は子供への悪影響があるとの世論や、それを受けた業界の自主規制、1953年の街頭テレビの登場などがあり、50年代後半にはTVが家庭に普及するにつれて徐々に衰退した。

戦前は、昭和初期に街頭紙芝居が登場し、紙芝居の製

第一部 紙芝居実演

作品1 「敵だ！倒すぞ米英を」

(神奈川県放送研究会)

作品2 「チョコレートと兵隊」

(神奈川県放送研究会)

作品3 「空の軍神加藤少将」

(なつかし亭・岸本茂樹)

作品4 「神兵と母」(なつかし亭・岸本茂樹)

第二部 公開研究会

講演：「国策紙芝居とはなにか」

櫻本 富雄 (作家・元東京学芸大学講師)

公開座談会：「戦意高揚紙芝居コレクションの位置づけを巡って」

(座談者)

櫻本 富雄 (作家・元東京学芸大学講師)

中島三千男 (非文字資料研究センター 研究員)

安田 常雄

(神奈川県歴史民俗資料学研究科教授)

富澤 達三

(非文字資料研究センター 研究協力者)

司会：津田 良樹

(非文字資料研究センター 研究員)

作者と実演者を仕切る貸元集団のもので大きな興業人気を博した。しかし、1937年の日中戦争を境に戦時色が強まり、1938年には日本教育紙芝居協会という国策団



写真3 公開展示④



写真4 公開展示⑤

体のもとに脚本家や画家も統合され、紙芝居も国家の言論統制の網の中に編入されていく。1940年には大政翼賛会が組織され、大政翼賛会文化部の仕事として児童文化の新体制の構築が志向され、内閣情報局の主導で1941年12月23日に社団法人日本少国民文化協会という組織が創設される。これにともない、日本教育紙芝居協会は、日本少国民文化協会の一部会に吸収される。

このような全てのメディアが高度国防国家の構築を目指す国家の言論統制・検閲のもとにあった時代に大量に制作された印刷紙芝居が、いわゆる「国策紙芝居」あるいは「軍国紙芝居」と称されるものであり、戦争協力の一翼を担ったという嫌疑から、戦後、GHQによる検閲と処分を招くことにつながる。



写真5 公開展示⑥



非文字資料研究センターでは、2012年末、神田の古書市場からカタログベースで「戦意高揚紙芝居コレクション」241点の紹介があり、本センターの資料収集方針に合致するという事で購入を決定した。

本コレクションは、全241点中223点（約93%）が太平洋戦争下の1941～1944年の4年間に刊行され、同じく177点（約73%）が日本教育紙芝居協会ないし日本教育画劇から刊行された作品によって構成されている。

全体的な作品傾向としては、当時の国策的意図が明確に表れているもの（顕現的作品群）と、必ずしもそうではないもの（非顕現的作品群）との割合が相半ばしており、これらを一括して「戦意高揚紙芝居」と称することの適否が指摘され得る。しかし、紙芝居は、個人が黙読で繰り返し読み鑑賞する文学作品と異なり、作品・実演者・聴衆という3者が出会う共同の場で披露され流通する媒体であった。その意味ですべての作品が当時の検閲機関のもとで統制的に出版されてきたものであるという形式的側面とともに、戦時下の民衆レベルにおけるメディアの受容形態（国策への「共感と抵抗」の歴史心理）を分析する研究課題という両面に着目する必要がある、研究対象としてこれを「戦意高揚紙芝居」と称することは妥当性を欠くものではないと考えている。

本コレクションは、納品後ただちに図書館における通常整理、燻蒸・脱酸処理を行い、紙芝居の書誌的情報は、2012年度末から図書館蔵書検索OPACから検索することが可能となっている。次なる段階として、本資料の研究上の活用方策が検討課題として浮上した折しも、本学において「デジタルアーカイブ」プロジェクトが開始され、本センターもそのプロジェクトの一員として参加することとなった。この「デジタルアーカイブ」からは、2013年5月上旬より、日本常民文化研究所と大学資料編纂室のデータベースの一部公開を開始したが、本センターとして、紙芝居資料のデジタル発信の開発に携わるなかで、これまでにくる程度解決できた問題、なお＜解決に時間を要する問題＞、＜解決の見通しが立たない問題＞があることに気づかされた。非文字資料研究センターという研究機関としての役割のうち、紙芝居の情報発信に限ってであるが、この点を紹介して概要の説明と問題提起とする。

(1) ある程度解決できた問題：紙芝居資料の分類

図書館OPAC、デジタルアーカイブに共通するシス

テム上の問題として、何らかの検索語を投入しない限りレスポンスを得ることができないという現象を解決するために、資料全体を俯瞰できる補助的な検索手段を提供することが必須と考えられた。紙芝居関係文献を調べるなかで、平林博『紙芝居の実際』（照林堂書店、1943）に、当時の紙芝居分類の体系が示されており、その後の研究文献にも多く引用されていることが判明した。そこでコレクション全体を俯瞰するための手段として、独自の分類体系を考え出すよりも研究者の繰り返しの引用に耐えてきたこの分類体系に基づくことが良策と判断し、これをもとに分類を試みた。（「紙芝居分類目録一覧」は、研究会当日配布のレジュメに添付した。）

(2) 解決に時間を要する問題：紙芝居のデジタル化と著作権

デジタルアーカイブからの紙芝居資料情報の提供に取り組むなかで、台詞・絵画・音声の3つの素材情報のデジタル化作業と著作権処理の問題に直面した。この点、本センターの取り組みは、著作権保護期間を経過したものと、未だ経過していないものに分け、前者についてデジタル化作業を進めると同時に、後者について著作権者（継承者を含む）への許諾処理を行うという業務に着手したばかりである。また、音声化については、神奈川大学放送研究会に所属する学生の協力を得て、朗読録音を開始したところである。いずれも、かなり長期にわたる作業となることが予測される。

(3) 解決の見通しが立たない問題：紙芝居全国総合目録

解決の見通しが立たない問題とは、紙芝居資料の全貌を把握するためのアクセス手段となる全国的な書誌・所蔵情報に相当するものが作成されていないという問題である。同じ大衆的なメディアである映画・レコード・美術・漫画については、制作・流通・配給・観覧の仕組みが確立していることから、全国的な団体年鑑、大手会社の社史、研究者のアーカイブなどのかたちで情報が累積・整備されている。しかし、紙芝居は、日本教育紙芝居協会によって統合された戦時下の時期以外は、貸元という零細の仕組みのもとで動いてきたこともあり、販売作品情報さえ必ずしも整備されてこなかった。この点に関連して、静岡県立大学国際関係学部の森山優准教授が、2010-2011年度科研費「戦時・戦後期における啓蒙運動とメディア」をもとに、論文「戦時・占領期印刷紙芝居目録」（静岡県立大学国際関係・比較文化研究 Vol.11, No. 2 (2013. 3)) を公表しており、こうした先行研究のフォローアップと連携も本センター研究活動の課題

の一つとなると思われる。



写真6 概要説明 (非文字資料研究センター事務局)



写真7 会場の様子①

講演：「国策紙芝居とはなにか」 (櫻本富雄)

自分が文化人の表現責任を当時の生資料によって証かす仕事を長年行ってきた背景には、長野県小諸市の学齢期の体験が原点としてあります。国民学校4年の後期に、或ることが原因で、教室への入室も友人との交友も禁止という処分(クラス八分)を受け、登校すると校長室に終日立たされ、校長室が使用されるときは畳敷きの裁縫室に移されるという扱いを一年以上受けました。しかし、この屈辱を晴らすには、少年航空兵になって殊勲を上げるしか方法はないと思ひこみ、また、昭和18年の山本五十六海軍大将の国葬を悼む長野支局主催の作文コンクールで一位を取るといったような軍国少年でした。

昭和20年、6年生として最高学年の覚悟という作文を書かされ、教員が気に入るような虚偽の転向文を書き、クラス八分は解除されました。

8月に敗戦を迎え、友達の間で「二番目に腹を切って死ぬのは誰か」(一番目は当然校長、二番目は軍事教練の先頭に立っていた体操の教員か、あるいは教頭か)が話題になっていましたが、教員たちは一転して民主教育の推進者になりました。新聞誌上には、戦前の発言を隠す、あるいは最初から戦争反対であったという文化人の言論が掲載されました。



写真8 紙芝居実演 (放送研究会)
作品：「敵だ！倒すぞ米英を」



写真9 紙芝居実演 (放送研究会)
作品：「チョコレートと兵隊」



写真10 紙芝居実演 (岸本茂樹氏)
作品：「空の軍神加藤少将」 / 「神兵と母」

私は、心底からの怒りを覚えました。それは彼らを信じた自分自身への怒りであり、その怒りの正体と客観的に向き合うために、彼ら文化人の戦時中の発言・表現を集めることを決意しました。それが私の仕事の出発点になっています。

昨今の学生は戦争を、歴史を知らないと言いますが、これは戦争を語り継がなかった大人の、そして嘘を教えしてきた社会の責任です。

8月15日を終戦記念日として祝うことが報道されますが、日本の敗戦日はミズーリ艦上で重光葵代表が調印した9月2日です。8月6日に原爆を投下された広島の外には、凱旋の塔がありますが、これは明治29年の日清戦争勝利の碑です。8月9日に原爆被害を受けた長崎の平和記念像の製作者は、戦時協力者であった芸大の



先生です。宮崎の八紘一字の塔は、大東亜共栄圏の各地から持ってきた石で造られたものですが、平和の象徴だと言う。ここには大東亜共栄圏への反省がひとつもないのです。東大で設置を拒否された結果、立命館大学に建てられたわだつみ像を作ったのは、戦争美術展への協力者です。

画家（戦争賛美の絵を描き責任追及されながらフランス人になったフジタツグジ、南洋の黒人の女の子を描く同じタッチで原爆の図を描いた丸木（旧姓赤松）俊）、作詞・作曲家（東条の次は自分かと追及を惧れていた西条八十、多くの軍歌を作曲しながら「ナガサキの鐘」「君の名は」などをつくった古関裕而）、詩人（反戦詩人と評価される一方でヒトラーユーゲント賛美の檄文を書いていた金子光晴）、小説家（戦中住井すゑ子の筆名で「少女クラブ」に天皇に尽くす少女になれと言った小説を書き、佐久良東雄の伝記を書いた住井すゑ）など戦争協力の表現責任を問われるべき人物は、枚挙にいとまがありません。

私は、このような文化人の転向を見て、戦時下の言動を収集して記録することが必要だと考えたのです。小学校6年を修了して、東京の市立二中現・上野高校に入り、葛飾の青砥で自活しながら、村野四郎氏に師事して詩作への志を育てました。

或る時、宮益坂の詩の専門店・中村書店へ行く途中、古道具屋で紙芝居の舞台を見つけ手に取ったら、その中に「椰子の仲裁」（端本）が入っていました。紙芝居は図書の扱いではないので、当時の古道具屋に新聞や雑誌とともに束になって売られていたのです。これが紙芝居収集の切っ掛けでした。

その後幼稚園の経営に関わるなかで、TVカメラで紙芝居を園内放送したりしました。そのような関係で、NHKの全国放送教育研究会の事務局長を任せられ、その活動をしつつ全国の古本屋を回って紙芝居を収集しました。全部で500セットくらい集めましたが、戦時下の印刷紙芝居が一体どのくらい制作されたのか。日本紙芝居協会（京成町屋にあった朝日のダミー会社）の会長であった佐木秋夫という宗教学者は、東京裁判の検事側証人になった人ですが、彼の命令で証拠を隠す為に国策紙芝居を燃やすのに一週間かかったと伝えられています。協会の企画を受け紙芝居を印刷した朝日新聞社のダミー会社・日本教育画劇株式会社も幽霊のように消えてしまいました。こうして国策紙芝居の多くは散逸したため、実態解明が難しいのです。

国策紙芝居にも「七つの石」や「太郎熊と次郎熊」など良いものがあります。しかし、現時点から見て、紙芝居の研究課題として、どういうことが大事か。

一つは、印刷紙芝居の実態の解明ですが、最近、戦時下に発行されていた雑誌『紙芝居』が復刻されましたので、これによって研究を進める新たな環境が出てきました。

二つ目は、紙芝居の脚本家・画家の実態解明ですが、これはなかなか解明の方法が難しいところです。

最後に、なぜ紙芝居にこだわるかをお話して講演を終わります。有力新聞社が紙芝居の制作・販売に関わったのは、政府機関・軍・産業団体・新聞社・各宗派などをスポンサーにして、売り上げが保証されていたからです。紙芝居は、今のマスメディアの代名詞と言ってよいと思います。このマスメディアを利用して国民を洗脳しました。そして戦争の道を突き進んだ代表者なのです。このような役割を担った紙芝居を、現在の時点からあらためて解明することに取り組む若手の研究者、非文字資料研究センターの活動に期待したいと思います。（拍手）



写真 11 櫻本富雄氏

公開座談会：

発言者略称：中島（中島三千男）・安田（安田常雄）・富澤（富澤達三）・櫻本（櫻本富雄）・会場（一般参加者）

中島 公開座談会の司会役を務める中島です。櫻本先生のご講演では、日本の文化人の体質に対する一貫した怒りを発条とした戦時下の言論資料収集のお仕事が紹介されました。あえて纏めることはせず、早速、公開座談会を始めたい。本日は研究者以外の方も多く参加されているので、フロアとの意見交換も重視したいが、最初に、本センターとしての研究課題を明らかにするため、2014年度からの新プロジェクトのチーフとなる安田先生より、その点についてご発議願います。

安田 私は紙芝居の研究プロパーではないが、15年戦争期のメディアの役割に関心があり、当時の映画を中心

にいくつか論文を書いている。本センターが収蔵した紙芝居研究の構えを検討中だが、まずは作者を含めてその全貌が不明であることから、第一段階としては、作家性の問題と聴衆側の受容論から着手する必要があると考えており、現時点での「戦時下日本の大衆メディア」研究の視点として、以下の4点を提起したい。

- (1) 紙芝居の文化特性：文化としての紙芝居の特徴を独立した形で対象化し、昭和初期に高揚期を迎えた有力な大衆メディアとしての役割を解明することが重要である。とりわけ、明治以来の大道芸の系譜に連なるであろう紙芝居が演じられた「場所性」の問題、および子供の暮らしの重要な一コマを形成したであろう紙芝居実演者による「手渡しのメディアの直接性あるいは原型性」がもった機能に着目する必要がある。またやがて大人向けの常会で演じられるようになる国策紙芝居への「子供という存在の関わり」の実態、さらには実演者の徴兵・工場動員、子供の疎開などによる「戦時下の生活場面の変化」を、国策紙芝居の前史となる昭和初期の街頭紙芝居時代・日本教育紙芝居協会成立とともに言論検閲下に入る国策紙芝居時代・太平洋戦争開始以降という歴史的な文脈をも絡ませながら捉えていく必要がある。
- (2) 紙芝居の作家性：紙芝居は描くことと見ることの相関において成立する。櫻本先生が指摘された表現責任の問題、紙芝居作家の「内的必然性」を分析することがもう一つの重要な研究課題となる。作者の制作動機は、作品の良し・悪し、好・不評を生み出す基本にあるだけでなく、各時代の細部の像を復元し、時代の複雑さを複雑さとして捉えるためにも、作品制作への関与動機あるいは作者の内在的問題を軸にして考察する作業は欠かせない。先ほど実演された「チョコレートと兵隊」は昭和13年に映画化され、UCLAにフィルムが保管されていたが、2004年9月に国立近代美術館フィルムセンターの高峰秀子展で上映された。平野共余子氏によれば、「日本映画 ある心理作戦」というアメリカの日本研究プロジェクトに携わったR.ベネディクトはこの作品を「反戦映画」と捉え、F.キャプらは「戦争を支えるものの手強さ」をその中に読み取ったという。実は映画のラストシーンには、長男が「チョコレートなんか要らない」「自分は父親の仇を討つ」と決意する場面が描かれているが、紙芝居作品は1936年版・1941年版ともに「仇を討つ」ラストになっていない。これをどう読むかは、1941年版の脚本家・

國分一太郎の作家性にかかわる問題であり、他の作品を含めて多様なファクターを如何に読み解いていくかという課題として捉える必要がある。

- (3) 植民地紙芝居：国策紙芝居のなかに、満州や南方の戦線で演じられることを目的として作られた「植民地紙芝居」あるいは「宣撫紙芝居」があり、その中に女性画を描いた小野佐世男、漫画家の横山隆一などが関与した作品もあると考えられる。紙芝居と植民地という文脈で、この実態解明も重要である。
- (4) メディア研究へのスタンス：多様な広がりをもつメディア研究は近年多くの実績を上げており、広い意味での表象文化論というアプローチで紙芝居を読み解く方法もある。しかし、時代の実態を細部にわたって解明するためには、メディア研究の方法論を潜って、もう一度現代史の現場に問題を戻すという方法を取り入れるべきであると考えている。

中島 安田先生から、本センターの研究への取り組みについて、作家性の問題・作品の読みの問題など、重要かつ基本的な構えが提起された。つづいて、富澤先生のご発言をお願いします。

富澤 お手元のレジュメをご参照ください。実証中心の日本の歴史学のなかで私が取り組んできた文化史・民俗学の研究歴と、本センターの紙芝居閲覧をとおして、大衆メディアおよび国策紙芝居について感じたことをお話しします。

- (1) 現在“クールジャパン”として称揚されている日本のサブカルチャー（映画、アニメ、漫画など）は、すべて戦争協力をとおして形成されたものである。戦後公職追放を受けた円谷英二「ハワイ・マレー沖海戦」（1942年）は最高水準の特撮映画であり、初の長編漫画映画「桃太郎の海鷲」（1943年）そして「桃太郎海の神兵」（1944年）は海軍省後援で新兵教育のためにつくられた。漫画家には公職追放者はないが、さきほどの実演作品の画家である近藤日出造の戦時下の活動は、石子順造また櫻本先生の「戦争とマンガ」において批判されているとおりである。
- (2) 戦争紙芝居への雑感として、街頭紙芝居と違い大量生産されたことによる観衆の多さ、また大人向きの作品も多いということ。人物諷刺画よりも絵物語風の密度の濃い人物と背景が一体となった描写作品にアピール性があること。街頭紙芝居のような連続ものではなく20枚前後で一作ごとに完結する脚本のほうが訴求力が高く、そこに国策紙芝居の高いメッセージ性が認



められることなどを指摘したい。

- (3) 作品の傾向としては、露骨な戦意高揚・敵愾心を煽る作品よりも、銃後・町・農村共同体の維持・団結を描き、「家族愛」「同僚愛」「属する組織内での誠実さ」を訴える作品に、訴求力のある作品が多い。
- (4) 最後に研究のテクニカルな問題として、デジタル発信による紙芝居資料へのアクセス環境を整える必要があるが、その一方で、研究としては原資料に即することが必要であることにも留意したい。

中島 これまで安田・富澤両先生から、研究上の課題についてお話があったが、次は会場から、特に若い方々からの発言を求めたい。

会場 院生です。さきほど「紙芝居は半径3メートルの宇宙」という紹介があったように、紙芝居が演じられた現場感が、デジタルアーカイブでは希薄になるのではないかと。研究資料として取り組む際に、当時の聴衆との距離感が分からないのではないかと感じました。また、「チョコレートと兵隊」を当時、誰が、どのように見ていたかを知りたいと思った。

会場 同じく院生です。転向の問題が取り上げられたが、転向しなかった人の作品があれば見てみたい。

会場 昭和17年生まれの漫画家です。作品を見て感動したらどうしようと思っていたが、感動しなかった。それは作家の想いが無いから、安田先生の言う「内在性」が無いからだろう。実演者は良かったが、作品は良くない。絵にも傑作はない。元々、民衆も戦争をそんなに甘いものとは思っていなかっただろう。日本人はもっと利口だったと思う。現在の政治漫画は墮落しているが、希望として、国策紙芝居 VS 反戦紙芝居の場をつくってほしい。その際は私を呼んでください。

中島 実演作品以外に、櫻本先生の著書で紹介されている「七つの石」「軍神の母」などがある。やはり核心は、貧しい母ものに琴線に触れるものがあるということだろう。

会場 母ものに感動する日本人的な感性を克服しなければ

ならないと思う。

事務局 これまでの討論で、研究上の課題として、デジタル化による紙芝居資料へのアクセスに伴う問題や、作品分析の問題などが取り上げられた。作品分析については、安田先生の基本的なご指摘とともに、さらには個々の作品ごとに、時代・場所・登場人物・脚本のキーワード・そこから導かれるメッセージなどをデータベース化していくというアプローチがあるかと思われる。この点同じような研究に先行して取り組まれている静岡県立大学の森山先生が会場にお見えになっておられるので、お話をお伺いしたいと思います。

森山 私達の研究は、静岡県掛川市の篤農家に、戦時下に入手した初期の疎開児童を聴衆として演じられていた紙芝居190点余が所蔵されており、これを調査することから始まった。これをどう位置付けるかという観点から出版点数を調べた結果、刊行作品は約1000点くらいと把握している。私達が調査した紙芝居目録と貴センター所蔵作品との重複をOPACで調べたところ約100点くらいが未見であり、その意味でユニークなコレクションとすることができる。紙芝居の分析という点については、街頭紙芝居の分析手法が国策紙芝居に通用するか、有効であるか疑問であり、いったん切り分ける必要があると考えている。むしろ、常会や工場などで演じることを前提に大人向けに作られたものが主である国策紙芝居の出版の意義性というか、政府をバックに紙の統制も受けずに販売の労苦もなく作られた、幻の雑誌『紙芝居』でも粗製濫造が当時から指摘されていたという点を踏まえる必要がある。さらに、国策的な意図が明確でない作品が半数を占めるという紹介があったが、そのような子供向け作品にどのような視線を向けるか、たとえば戦前戦後ともまったくブレていない農村ものの代表者・川崎大治をどう評価するかは重要な点ではないかと思う。

中島 ありがとうございます。研究課題だけではなく、ご自分の体験談などを含めて一般の方からのご意見もお



写真12 中島三千男氏



写真13 安田常雄氏



写真14 富澤達三氏

伺いたいと思います。

会場 井上ひさし氏の東京裁判の三部作「夢の裂け目」を読み、戦時下に子供が紙芝居をどう受け止めたかに興味をもった。戦後も紙芝居文化が広がりを保ち、今回新聞で催しがあることが分かり、参加してみても櫻本先生が沢山の本を書かれていることを知った。今後のお願いになるが、貴センターの研究の成果を一般市民にも知らせていただけるようにしてほしい。

会場 私は昭和9年、茨城の水戸の生まれだが、国策紙芝居を見たことがない。学校でも街中でも見たことがない。工場などで演じられていたのだろうが、そうしたものが、戦時下に大衆メディアとして成立していたと言えるのか、誰を目的に作られ、誰が見ていたのかを解明する必要がある。

会場 さきほど女性の涙の問題があったが、それが国策紙芝居の目的のひとつであったのではないかと。女性はこうあるべきだという決めつけが今に引き継がれているのではないかと。銃後に残された女性向けの町内会での上演目的はそこにあったと言えるのではないかと。

会場 櫻本先生の旧所蔵500点中、神奈川大学に入らなかった残りはどこへ行ったのだろうか。

中島 ご意見ありがとうございます。それでは、最後に登壇者の先生方から、補足的なご発言があればお願いします。

櫻本 私が紙芝居研究でできなかったことがある。「レコード紙芝居」というものがあるが、この全体が把握できていないこと。「駄菓子屋紙芝居」たとえば「ダムダムダン吉」など4点がコレクション中にあるが、このような紙芝居が他にいくつあるか未調査であること。今回復刻され幻ではなくなった雑誌『紙芝居』の全貌やそこに掲載されていた新作の合評会の記事などが未検討であること。吉屋信子氏が昭和17年2月に女流の会というところで行ったと言う紙芝居実演、壺井栄が従兄に紙芝居の舞台とセットを贈ったという記事があるが未確認であること、などである。

安田 さきほどお話できなかったことを2点補足する。文化人・知識人の転向問題は思想があることが前提の議論であり、技術・技能を支えにしてきた人々の転向の扱いは従来の研究では空白である。もうひとつ、戦後の街頭紙芝居がつぶれていくプロセスの中間に貸本文化への流れがあり、これは国策紙芝居と決定的に違う紙芝居文化がもつ或る種の“いかがわしさ”の行方というかなり大きな問題につながる。

富澤 デジタルアーカイブでは紙芝居の魅力が減じるのではという意見があったが、常会などで演じられたことを考えるとある歴史の中でだけ成立したメディアなのだろうと思う。また母も作品の涙の問題ですが、女性の社会進出が戦時下に進んだということとあわせ、フェミニズム研究からの分析も求められると考える。

中島 ありがとうございます。以上で公開研究会を終わります。今後のセンターの研究に対する要望も出されましたが、センター長のもとで取り組んで行かれることを期待したいと思います。

(文責：非文字資料研究センター事務局 原田広)



写真15 公開座談会の様子



写真16 会場の様子②



写真17 会場内のパネル展示